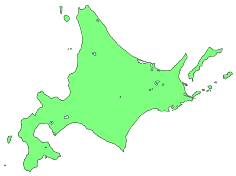
日本の科学者ＶＯＬ.53　ＮＯ12　2018 年 12 月 1 日　　発行　付録

JSA 北海道支部第 3 水曜の会



ニュースレター

No.497 発行：日本科学者会議北海道支部第 3 水曜会

〒011-0022　札幌市北区北 22 条西 2 丁目 1-2　静麗荘 32 号室
Tel/Fax：011-707-2299

☆「ＡＩ(人工知能)の歴史と未来　中島秀之(札幌市立大学学長)講演を聴いて　☆本の紹介　☆絶景

「ＡＩ(人工知能)の歴史と未来　中島秀之(札幌市立大学学長)講演を聴いて

高畑　滋

近年急速に進歩している AI の世界について、専門外の人にも判り易く解説された。ＡＩとはコンピューターによる情報処理で、人間の知的行為を解析、代行できる技術と理解していたが、さらに進歩して、人間の知的領域を超えて、従来の人間社会の仕組みを代える情勢にあると指摘された。生産現場では生産手段に AI が組み込まれて、人間労働の質的・量的変化が起き、労働の目的や価値まで変化してくる。このことは現行の社会・経済システムの改変を伴うもので、AI 発展社会のデザインを研究する必要がある。これは情報処理工学の手におえるものでなく、社会・経済学の広範な科学者の参加が望まれると指摘された。

農林業でもＡＩ化が目覚しく、宇宙衛星やドローンに至る各プラットホームレベルから、地表面の測定によって、識別、分類、成長量、病虫害、気象異常、土壌水分、栄養など多種の情報判別から対策まで AI の導入が可能である。GPS と AI トラクターによって、地上での無人農作業や無人ハウス農業も研究されている。一方で農作業には人間にとって自然や動植物と接する貴重な機会であり、保健・休養、教育効果が認められている。AI 導入により減少した労働に代わって、週休日を菜園で過ごすライフスタイルも提唱されている。食物に関しては必須栄養の他に、嗜好・生き甲斐、郷土料理などの面から、多種多様、個別的な食べ物が生産・摂食される。AI 社会において人間の存続にかかわる食生活が人間本位に保証されるよう農学研究者は心掛けねばなるまいと感じた。

AI 社会の到来に、全ての科学領域にまたがる日本科学者会議がとりくむべき課題を示された講演であった。改めて、人間だからできること、人間だから考えなければならない事をするのが科学者であると肝に銘じた。

本の紹介

退職して２０年も経つと、視聴力や体力も衰え、自分の昔の研究領域や学会の動きにも鈍感になって家に閉じこもりぎみです。難しい論文ばかり載っていた『日本の科学者』１１月号に中嶋さんが絵本『たんぼに、あおぞら、みーつけた』の紹介しているのを見つけ、早速、買って読みました。

男の子を背負って、水を入れた田んぼの生き生きとした生物界の動きを、季節の移ろいとともに、分かりやすく、お母さんが子供に語って聞かせる物語をこの本は、視覚で訴えています。

中嶋さんは、この文章の最後に「この男の子の心身には、お母さんと一緒に見た一連の光景が原風景として深く記憶され、彼は大きく育ち、いずれ JSA の会員となり、生物学者として地球保全に寄与する逸材となるでしょう。」と書いています。福音館発刊　値段３９８円　　**（前田　満）**

絶景

薄暮の大河石狩川

薄暮の石狩川を空撮した。北海道の母なる川だけあって上空から見ても大きくて雄大だ。

夕日が落ちて徐々に暗くなる薄暮の時、石狩川の河口付近を幸いに写真に収めることができた。周りの景色は全く見えなかったが、大河の流れだけはくっきり浮かび上がるように白く見えた。

石狩湾の湾曲の素晴らしさもさることながら、石狩川の流れが目を見張る。特に真ん中あたりの大曲線は川のショートで直線にした結果、残った川跡の茨戸川だ。こうしたショートカットで石狩川は、本来の長さより１００ km余りも短くなった。　**（村元健治）**